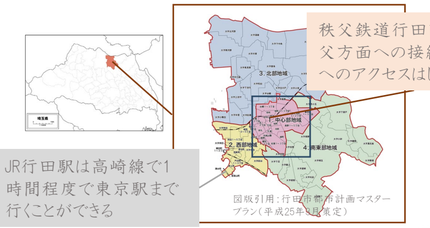
足袋蔵と暮らすまち

敷地

埼玉県行田市

行田市駅の位置する中心部地域はかつて城下町であり、江戸時代から足袋の生産が盛んに行われ、足袋を保管しておく倉庫として足袋蔵が町の至る所に建てられた。現在も市内には約80棟の足袋蔵が現存している。



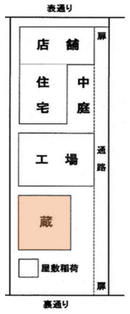
秩父鉄道行田市駅は、秩父方面への接続で、都心へのアクセスはしにくい

JR行田駅は高崎線で1時間程度で東京駅まで行くことができる

図版引用：行田市都市計画マスタープラン（平成25年度策定）

行田の足袋蔵

足袋の一大生産地となった行田では、生産量の増加に伴い、出荷が本格化する秋口まで製品を保管しておく倉庫として既存の土蔵の転用と共に、敷地の一番奥に足袋蔵が数多く建てられるようになった。城下町であった行田は、間口の広さに応じて各家に税が課せられていたため、間口が狭く奥行きが長い短冊型の敷地が通り沿いに並ぶ町割りが形成されていた。このような事情から、裏通りに面した蔵の多い行田独自の街並みが形成されていった。



足袋商店の建物配置

図版引用：行田市HP
文化庁日本遺産提出書類

足袋蔵の現状

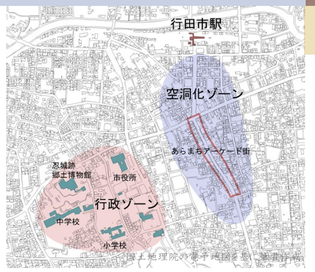
現存する足袋蔵のうち、足袋蔵として利用されているものや改修され転用されているものは一部であり、倒壊しかけていたり人の手が入っていなかったりと社会的に負の遺産になりつつある。

分析

行田市の課題

・都心への交通の不便　・足袋蔵の活用
・人口の減少　・商業機能の空洞化

行田市の中心部地域は足袋産業の規模縮小や交通の不便から生産・商業機能が失われつつあり、空洞化が進行している。



国土地理院の電子地図を基に筆者作成

人々のライフスタイルの変化

リモートワークや職住近接など、働き方の価値観が変容しつつある現在において、都心に通うことを重視しない人々も増加している。歴史的積層の残る中心部地域はそのような人々にとって魅力的な場所になりうるのではないだろうか。

出社が基本　　場所を選ばない働き方

「歴史的遺構の残る場所で文化的に豊かな暮らしが実現できるまち」の提案

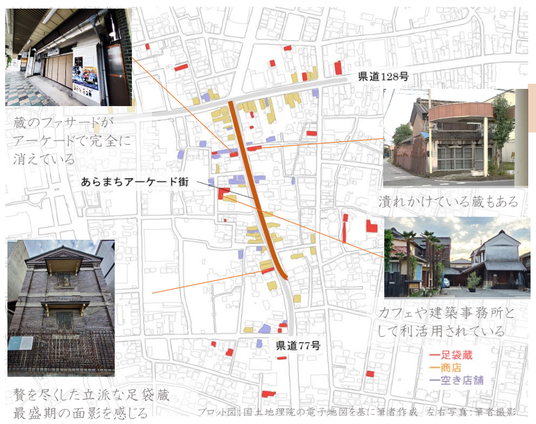
あらまちアーケード街

敷地とするあらまちアーケード街は古くからの商店が立ち並ぶ通りである。現在も一定の区割りの面影と足袋蔵は残っているが、駐車場や空き地、空き店舗となっている部分も多い。現状商店の店主はほとんどが高齢者であり、今後シャッター化や空地化が更に進んでいく可能性が大きい。

町の中心となる商業空間であった土地の歴史を持ち、足袋蔵や城下町時代の区割り・建物配置が残るこの通りを再生させることで周辺地域の活性化を図る。

蔵のファサードがアーケードで完全に消えている

贅を尽くした立派な足袋蔵
最盛期の面影を感じる



ブロット図：国土地理院の電子地図を基に筆者作成　左右写真：筆者撮影

プログラム

全体計画

商店街に位置する足袋蔵をランドマークとし、周辺に公共空間を配することで人々が集い、交流する新たな商店街の形を見出し、その賑わいを地域に広げていく。

エリア分け

芸術・育み・健康といったテーマでエリア分けを行い、各テーマに合わせた公共機能を入れていく。3つのエリアの中心となるゾーンには交流エリアを設け、多世代の集う場の形成を図る。

エリアのテーマ・ターゲット層に沿った店舗入居を商店街組合と行政が進める → 徐々にターゲット層に合わせたエリアごとの雰囲気が形成される → 商店街全体として幅広い世代の集客につながっていく

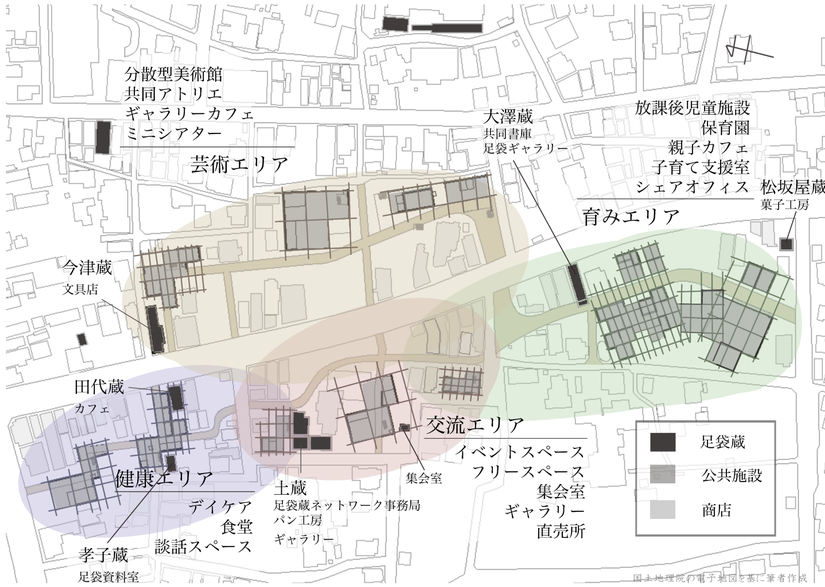
グリッド

城下町時代の町割りを意識し、グリッドを設定する。グリッド状にすることで将来的な機能の転用・増築や減築が容易となり、既存商店が空き店舗化した際も取り込むことが可能となる。

3600×7200　町割りが残る場所 子どものための場所
7200×10800　人の集まる場所
10800×14400　周辺の建物が大きい場所 人の多く集まる場所

歩行者空間

裏通りに面している足袋蔵が多いことから、裏通りを開く、あるいは区画内に歩行者通路を通すことで今まで町に見えてこなかった蔵が表に現れる。



国土地理院の電子地図を基に筆者作成

足袋蔵活用の提案

足袋蔵の使われ方

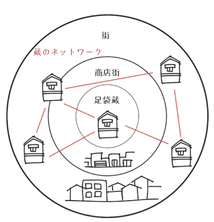
現状
＜所有者が利用＞

現状の一部　より増やしていく
＜改修して個人が商店として利用＞

新たな活用
＜行政が買い取り・借り受け
公共空間として活用＞

一部

＜足袋蔵ネットワーク＞
町なかに点在する足袋蔵をワークスペースや集会室等として利用できるようにすることで、町のランドマークである足袋蔵を通じて住民同士の交流が促進され、豊かなコミュニティが形成されていく。

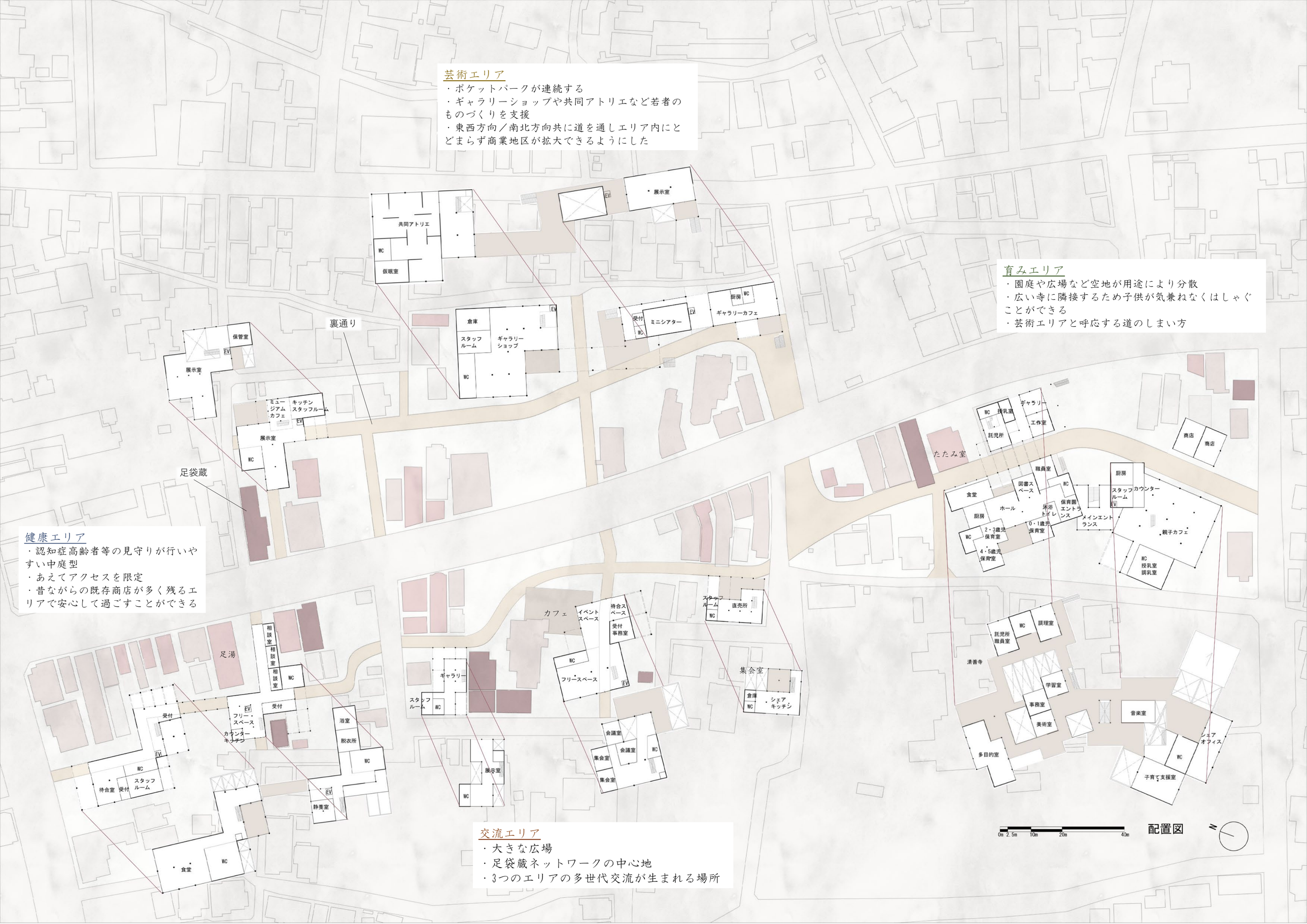


芸術エリア
・ポケットパークが連続する
・ギャラリーショップや共同アトリエなど若者のものづくりを支援
・東西方向／南北方向共に道を通しエリア内にとどまらず商業地区が拡大できるようにした

育みエリア
・園庭や広場など空地が用途により分散
・広い寺に隣接するため子供が気兼ねなくはしゃぐことができる
・芸術エリアと呼応する道のしまい方

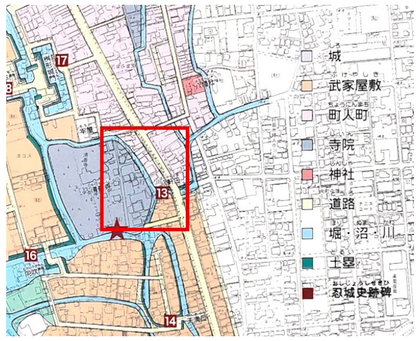
健康エリア
・認知症高齢者等の見守りが行いやすい中庭型
・あえてアクセスを限定
・昔ながらの既存商店が多く残るエリアで安心して過ごすことができる

交流エリア
・大きな広場
・足袋蔵ネットワークの中心地
・3つのエリアの多世代交流が生まれる場所



育みエリア

設計手法



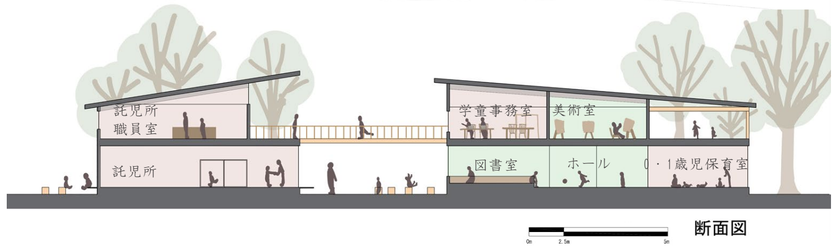
「忍城今昔地図」（清善寺前看板を撮影）

平成12年の測量図に文政６（1823）年の忍城絵図を重ねた「忍城今昔地図」（清善寺前看板を撮影）を見るとエリア内に堀が通っていたことが分かる。既存建物の配置にも堀の内外で町割りの有無がはっきりと見て取れる。これを手掛かりに歩行者のための道を通し、子どもにとっての第二の家、あるいは学校となるようなエリア計画を行った。

時間による機能の変化

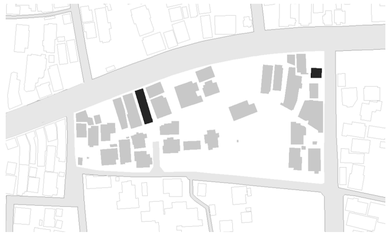
保育園の機能と学童機能を分散配置し、建物全体が子供たちの遊び場となる。
食堂やホールなどは日中は保育園児が利用するが、放課後は小中学生に開放される。

- 特定の利用者が利用
- 時間帯で利用者が変わる
- 誰でも利用できる



断面図

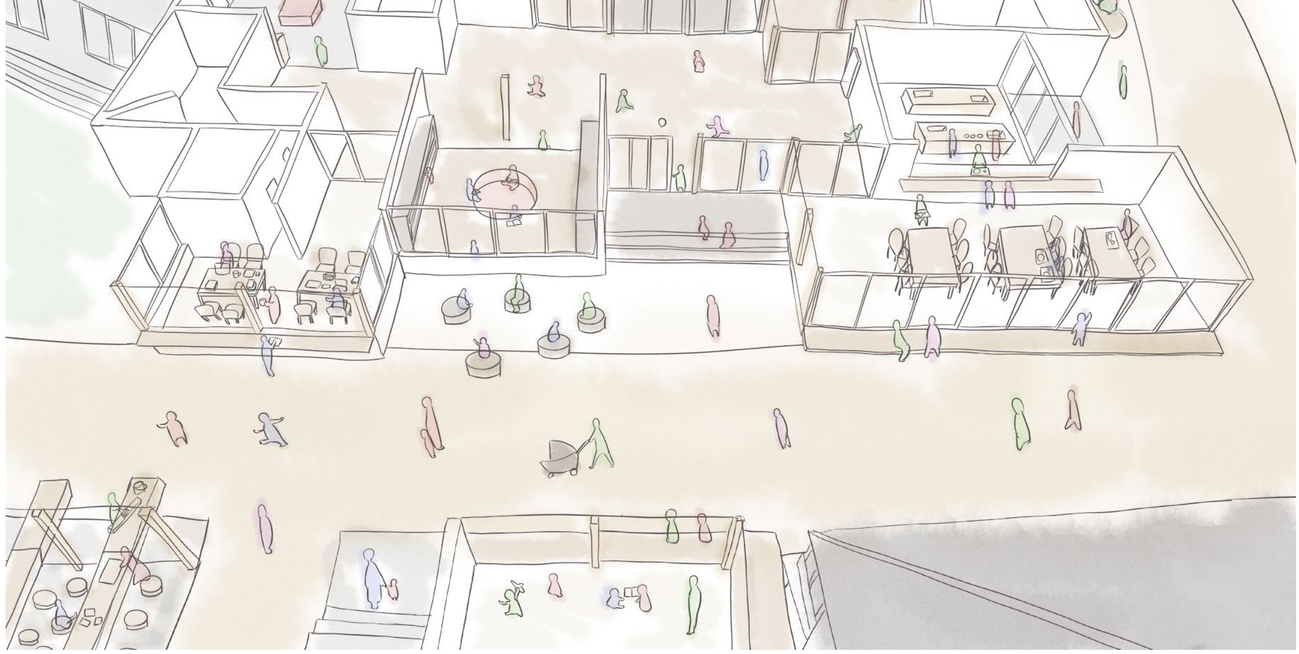
ダイアグラム


1．既存の建物配置

2．かつての堀の場所に道を通す

3．既存の町割りを意識したグリッドの設定

4．ボリュームの検討

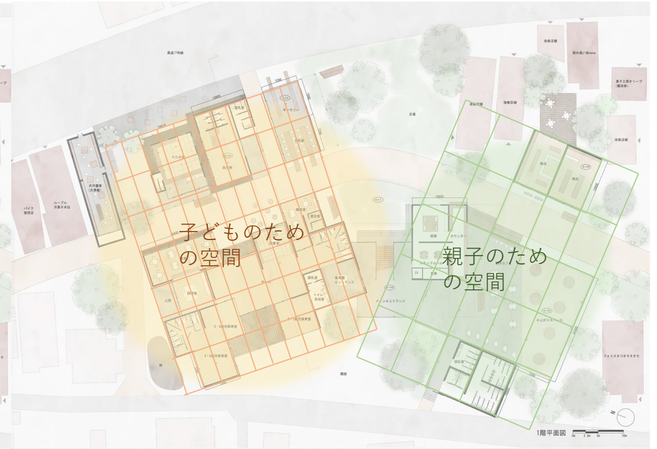


パブリックスペース

エリア全体に多様なパブリックスペースを設けている。

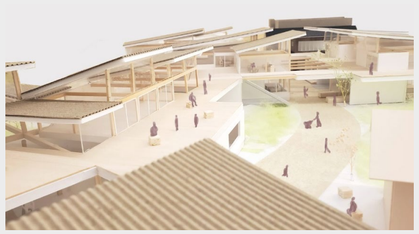
グリッド

子どものための空間は、家のような小さめのスケールのグリッドを、親子のための空間は開放的な大きめのグリッドを設定している。



外観イメージ

広々とした芝生広場からはさまざまな居場所が垣間見える


道や町割りに合わせて変化させたグリッドが建物全体に現れている

園庭はゾーニングされているが他者の気配を感じられるつくりになっている

人々の居場所

縁側やベンチなど意図的なはみだしをつくることで道自体が豊かな公共空間となる

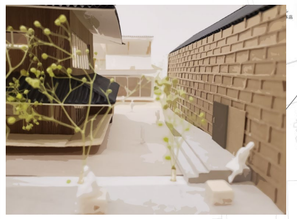
建物をセットバックすることで交流の場が生まれる

足袋蔵に集う

足袋蔵の周辺に自由なオープンスペースを設けることで人々は自然と足袋蔵に足を運ぶ。人が集まることで周辺商店の裏側だった場所が徐々に表に変化したり、新たな商店の入居が起こっていく。

大澤蔵

1F　共同書庫
2F　足袋ギャラリー



既存建物と一体となって広場をつくる
蔵は共同書庫として活用し、利用者がおすすめの本を持ち寄る地域の本棚
人や本との思いがけない出会いが生まれる場所

松坂屋蔵

1F　菓子屋
2F　スタッフスペース

松坂屋蔵の裏手に木々と建物に囲まれた秘密の庭のような雰囲気のテラスを設けることで既存商店から裏手へ抜ける動線が徐々に生まれてくる

県道77号線
バイク
販売店
ルーブル
洋菓子本店
共同書庫
（大澤蔵）
蔵広場
10010
たたみ室
10800
授乳室
託児所
GL＋500
7200
ギャラリー
GL±0
工作室
芝生広場
改修店舗
改修店舗
改修店舗
飲み食い処sasa
菓子工房オリーブ
（松坂屋蔵）
蔵庭
改修店舗
商店
商店
GL＋300
10800
職員室
更衣室
GL±0
10800
厨房
カウンター
スタッフルーム
EV
倉庫
14400
食堂
GL＋800
図書室
ホール
調理室
土間
調乳室
トイレ
沐浴室
保育園
エントランス
GL＋500
メインエントランス
ベビーカー
置き場
親子カフェ
GL＋800
小上がりスペース
21600
3・4歳児保育室
0・1歳児保育室
4・5歳児保育室
畑
1200
7200
園庭
授乳室
7200
10800
フォトスタジオキタオカ
N
0m
2.5m
5m
10m

1階平面図

7200
7200
7200
10800
調理室
託児所
スタッフルーム
合宿所
行田足袋
ギャラリー
学習室
学童事務室
美術室
10800
音楽室
EV
GL＋4000
14400
3600
多目的室
シェアオフィス
21600
子育て支援室
キッズスペース
N
0m
2.5m
5m
10m

2階平面図